

2020/09/20 青葉チャペル献堂 16 周年記念礼拝

ヨハネの福音書 講解メッセージ⑩

『5つのパンと二匹の魚』ヨハネ 6:1-14

「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行いなさい。」

(ピリピ 2:13-14)

神は、私たちの中に願いを起こし、働きかけ、人がそれに応答することで、ことをなしてくださいます。神は人を通して働かれるのです。ですから、もしあなたの中に願いが起こったら、つぶやかずに取り組んでみましょう。はじめは、自分の中に起きた願いが、神が語り掛けておられるのか、肉の思いかわからないので不安なものです。しかし、神が働いていることもあるわけですから、すべてのことをつぶやかず、疑わずに行うことで、前に進むことができるのです。

振り返れば、うまくいかなかったことや、「あれは肉の思いだった」と思い返すこともたくさんあります。でも、確かに主が働いておられ、ことが進められたこともたくさんあります。はじめはどちらかわからないものですから、願いが起きたら主と共に踏み出してみましょう。

#### ✠ 「五つのパンと二匹の魚」

「その後、イエスはガリラヤの湖、すなわち、テベリヤの湖の向こう岸へ行かれた。大ぜいの人の群れがイエスにつき従っていた。それはイエスが病人たちになさっていたしるしを見たからである。イエスは山に登り、弟子たちとともにそこにすわられた。さて、ユダヤ人の祭りである過越が間近になっていた。イエスは目を上げて、大ぜいの人の群れがご自分のほうに来るのを見て、ピリポに言われた。「どこからパンを買って来て、この人々に食べさせようか。」もっとも、イエスは、ピリポをためしてこう言われたのであった。イエスは、ご自分では、しようとしていることを知っておられたからである。」(ヨハネ 6:1-6)

イエス様が山に登ると、大勢の人の群れがついてきました。中には純粋な気持ちの人もいましたが、ご利益にあずかろうとか、野次馬的な気持ちの人でも大勢いたことでしょう。イスラエルの山は、丘のようになだらかで、広い草原になっています。そこに 5000 人の人がいたと書かれていますが、実際には 1 万人以上だったとも言われています。

それを見てイエスさまは、「この人たちにどうやって食べさせようか」と、ピリポに難題を持ち掛けました。「イエス様がピリポをためした」とありますが、これが願いを起こすということです。神様が私たちの心の中に願いを起こし、「お前はやるか？」と尋ねておられるのです。

たとえば、自分のまわりにクリスチャンが少ないなと思うとき、「クリスチャンがいないけど、どうする？どう思う？」と神様に尋ねられていることがあります。「伝道したほうがいいですよ。」という思いが浮かぶとき、「あなたなら、どうする？」と、さらに神様は尋ねておられるのです。

神学校を卒業した時、どうやったら牧師になれるのか、わかりませんでした。学校に教団からの求人が来てはいましたが、教団の牧師として就職する自分を思い描くことはできませんでした。自宅のリビングを使って礼拝を始め、救われる人が起こされるようになり、会堂がほしいと思い始めたときも、手元には10万円ほどしかありませんでしたから、現実にはとても不可能なことに思えました。

けれど、とにかく心に起きた願いに対して、前に進み始めた結果、私は今牧師をしており、これまで3つの礼拝堂を献堂することができました。心に起きた願いに対して、神が働いておられることを体験することができました。

「ピリポはイエスに答えた。「めいめいが少しずつ取るにしても、二百デナリのパンでは足りません。」弟子のひとりシモン・ペテロの兄弟アンデレがイエスに言った。「ここに少年が大麦のパンを五つと小さい魚を二匹持っています。しかし、こんなに大ぜいの人々では、それが何になりましょう。」イエスは言われた。「人々をすわらせなさい。」その場所には草が多かった。そこで男たちはすわった。その数はおよそ五千人であった。そこで、イエスはパンを取り、感謝をささげてから、すわっている人々に分けてやられた。また、小さい魚も同じようにして、彼らにほしだけ分けられた。」  
(ヨハネ 6:7-11)

ピリポが1万人分の食べ物を用意するのは不可能だと考えていた時、アンデレが、パンを五つと魚を二匹持った少年を連れてきました。イエス様がピリポに話しておられるのを聞いていた少年が、アンデレに申し出てきたのでしょうか。少年はイエス様の思いを知り、自分にできることはなにがあるだろうかと考え、自分が持っているものを持ってきました。しかし、その場には1万人もの人々がいたわけですから、「この量では何になりましょう。」と、まったく期待していないアンデレの様子が伝わってきます。それでも、アンデレは、とりあえずイエス様に報告しました。そして、奇跡が起きました。

神は奇跡を起こすことがおできになります。願いが来ても、多くの方は現実を見て、とても無理だと思いその願いをつぶしてしまいます。するとそこで神の願いは止まってしまいます。なんともったいないことでしょう。神は私たちに願いを起こすと同時に、解決を用意してくださっています。私たちが自分にできることで一歩を踏み出したならば、神は必ず責任をもって現実に至らせてくださいます。

「そして、彼らが十分食べたとき、弟子たちに言われた。「余ったパン切れを、一つもむだに捨てないように集めなさい。」彼らは集めてみた。すると、大麦のパン五つから出て来たパン切れを、人々が食べたうえ、なお余ったもので十二のかごがいっぱいになった。」(ヨハネ 6:12-13)

「一つも無駄に捨てないように。」とイエス様は言われました。神からの恵みを当たり前のことと思わず、無駄に使わずに大切にしましょう。

私たちの教会では、最初の会堂が建ってから、次々と不思議なことが起こりました。それまで礼拝では伝統的な讃美歌を歌っていましたが、ゴスペルソングという、よりわかりやすく自分の思いに近い歌詞の賛美を歌うようになってから、私たちの教会には、賛美の賜物を持った人がたくさんいたことがわかったのです。いろいろな人が次から次に新しい曲を持ってきたり、それまで楽器をやったことがない人たちが楽器をやってみたいと言ってきたりしたことで、新しい賛美の礼拝が生まれ、やがてそれは日本中にカセットテープやCDで紹介するミニストリーに発展しました。今も多くの教会で私たちの教会で生まれた賛美が歌い継がれています。神様に感謝をしていくと、そこからまた恵みが見えてくるようになるのです。そして、多くの方が救われて、再び新しい会堂建築の願いが起き、現在の青葉チャペルができたのです。

「人々は、イエスのなさったしるしを見て、「まことに、この方こそ、世に来られるはずの預言者だ」と言った。」(ヨハネ 6:14)

かつては世界最大の国であったイスラエルでしたが、当時のイスラエルには国も自治権もありませんでした。しかし、イスラエルの人々は、聖書の約束を信じ、神が主権を持った神の国ができることを信じていました。人々が、イエス様をこの地上の王とするために連れて行こうとしているのを知って、イエス様は山に退かれたのです。

人々が期待していたのは見える国でした。しかし、イエス様は、地上の王国を作るために来たわけではありません。イエス様が建て上げようとしていた神の国は、私たちの内側に築く国です。神が私たちの内側で主権者となって私たちを治める国です。

## ✠ まとめ

今日は、献堂記念日にあたって、5つのパンと2匹の魚の話から、次の3つのことを学びました。

### 1. 神はあなたを試みておられる

あなたが困難にぶつかる時、神は必ず「どうする？あきらめる？祈って進む？」と聞いておられます。状況が難しくなると、再び「どうする？」と確認なさいます。神の約束を信じ、自ら一步を踏み出しましょう。必ず神が働いておられることを体験することができます。

## 2. 神には用意がある

神が願いを起こした時には、必ずことをなしとげる用意があります。私たちの教会を建てる時も、神が願いを起こしてくださったのち、土地も用意されており、賛美の賜物も用意されていたことに気づきました。

神は願いを起こさせるだけでなく、必要を用意し、あなたに差し出そうと待っておられます。

## 3. 感謝を忘れない

神が、残ったものを「一つも無駄に捨てないように」と言われたのは、私たちが感謝を忘れないようにするためです。

それは、私たちの心はいつでもこの世に引っ張られて、神を見なくなってしまう恐れがあるからです。あるときイエス様が10人の不治の皮膚病患者をいやしましたが、その中で神様に感謝しに戻ってきた人はたったのひとりでした。私たちは、困難から助けられたその時は、本当にありがたいと思って感謝するものですが、困難が過ぎ去ると神の恵みを忘れ、神のいない生活に戻ってしまうものです。ですから、私たちには恵みを集めておく必要があります。それは、私たちの心が神から離れることのないためです。

教会では、毎年この時期に献堂の感謝献金を捧げます。宮前チャペルができた時は、本当にびっくりしたものです。20名ほどの信徒しかおらず、そのほとんどが学生だったのですから。また、青葉チャペルの建築の際は、会堂の規模も金額もけた違いに大きくなり、会堂が完成したことは驚くべきことでした。

いずれの場合も、私は思いました。「この会堂の代金は、いったい誰が払ったんだ？」

神は不思議なことをし、助けてくださいます。

誰かが頑張ったからではなく、ただ神が助けてくださったとしか言いようがありません。神の前では誰も誇ることができません。これからも感謝を忘れないで、いつも神の前にへりくだって、神と生きていきましょう。